world's **children**

No. 37

Afghanistan Guatemala Japan Nepal Pakistan



Save the Children

Message

ご挨拶

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）は、今年創立20周年を迎えます！

創立20周年を無事迎えることができますのも、ひとえにSCJを支援してくださる寄付者の方々、活動を支えてくださるボランティアの方々等、多大なご支援があってのSCJであり、この場をお借りして心から感謝申し上げます。今号では、SCJのこの20年の歩みを振り返り、またご協力者の方々からの励ましのメッセージをいただくこともできました。

一口に20年と言いましても平坦な道のりではなく、まさに日本におけるNGO（非政府組織）の歴史であったと自負しております。創立20周年を迎える喜びとともに、これからの未来を見据えて身が引き締まる思いで一杯です。皆さまの応援を礎に今後の20年を次のステップとして目指していきたいと思っております。

世界各地では、未だ紛争や災害が後を絶たず、セーブ・ザ・チルドレン(SC)の活動の場は、残念ながら増すばかりです。本年は、SCJの創立20周年と同時に、紛争の影響を受けた子どもたちが、より多くの教育の機会を持てるように、世界中のSCが連携して活動を始める「グローバル・チャレンジ」元年でもあります。今号で特集しております「権利に基づくアプローチ」を基本理念に、SCはより一層の躍進を続けていく所存です。

創立20周年という節目を迎えたSCJに対し、今後とも皆様のご理解と変わらぬご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

理事長　上野 昌也



Contents

1 ご挨拶

2 History
SCJ20年の歩み

3 Greetings
多くの皆様から暖かいメッセージをいただきました

5 Special Report
特集：[セーブ・ザ・チルドレンと「権利に基づくアプローチ」]

7 Financial Report：収支概要

8 Project Report：現地レポート（パキスタン、グアテマラ）

9 パートナーの紹介／イベント



1985

英国および米国SCの要請を受けた（社）大阪青年会議所並びに国際婦人福祉協会の有志がSCJ設立に向けて準備開始。

1986

SCJ誕生。世界連盟メンバーのフィリピン・タイの事業に資金協力。
その後SCJ事務所を現地に開設。

1987

ドン ペリニヨン　セーブ・ザ・チルドレン・チャリティ・ガラ開始。以後、年に1回開催され、現在19回を数える。

1991

SCJ初の海外事務所をフィリピンに開設。日本人を常駐させる。主に、都市貧困層支援事業を展開。

1992

ネパールに事務所を開設。日本人を常駐させ、農村開発事業を開始。現在は「すべての子どもを学校へ」をスローガンに教育支援を展開中。

ソマリア
91年以降内戦が続き、人口の半数が飢餓に瀕していたソマリアでは、英国SCが他の機関に先立って支援を開始。SCJも資金面で協力。

1993

CHAGE & ASKAさんがSCJ支援を表明し全国チャリティーコンサート・ツアーを実施し、それを機にファミリーマート全店舗にSCJ募金箱設置。

1994

紀宮殿下（当時）、タイのSCJ事業地をご訪問。現地の子どもたちと交流。



セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン20周年

SCJ 20th ANNIVERSARY

皆さまのご支援で20周年

国際NGOの草分けとして活躍するセーブ・ザ・チルドレンの
活動を、日本から支えて20年。
子ども支援のリーダーとして、いかなる宗教やイデオロギー
からも独立し、プロの集団として活動を展開してこられたのも、
日本の皆さまのご支援・ご協力があったからです。
今までの20年を礎に、これからの20年を目指して、
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、飛び立ちます。

旧ユーゴスラビアへ緊急援助
米国SCとの共同事業として、内戦によって被害を受けた旧ユーゴスラビア難民のための緊急援助活動を実施。

▼1995

外務省より社団法人の認可がおりる。
ベトナム事務所開設。日本人スタッフを常駐させ、栄養改善事業を開始。現在も「栄養不良児のいない家族、村を目指して」を目標にベトナム東北部で支援活動中。

阪神大震災
阪神大震災の発生時には、被災地域の調査を行い、子どもに特化して援助活動を行っているNGOを選出して資金面での援助を実施。

▼1996

SCJ設立10周年記念事業として、国際シンポジウムを開催。

▼1999

日英親善のために来日された英国アン王女をお迎えして「子どもボランティア発表会とチャリティー・ディナー」を開催。アン王女は英国SCの総裁を務められSCJ設立のきっかけにも携わる。ボランティア活動に積極的に取り組む学校の中から、240名の子どもたちが参加して募金活動の様子などのパフォーマンスを発表。アン王女も舞台に上がられ子どもたちと対話するなど日本の子どもたちと交流。



▼2001

ミャンマー事務所開設。栄養事業を柱に支援活動中。
モンゴルにてストリートチルドレン支援を実施。



インド西部地震緊急援助
インド西部グジャラト州での地震発生後の緊急援助活動において、募金活動と同時に日本人スタッフを現地に派遣。

アフガニスタン食糧援助
アフガニスタンは20年以上にもおよぶ紛争や近年の干ばつに加え、米国による空爆で大打撃を受ける。SCJではアフガニスタンでの活動経験をもつ米国SCと協力し、干ばつに苦しむ住民への食糧援助など、人道支援に重きを置いた活動を実施。

▼2002

アフガニスタンに事務所開設。教育事業を中心に復興開発支援中。
女優の藤原紀香さんがアフガニスタン訪問。「セーブ・ザ・チルドレン・藤原紀香アフガン基金」を開設。



▼2003

日本の子どもたちを対象とした教育事業、Speaking Out～みんなで話そう～プロジェクトを開始。

イラク人道支援
米国などによるイラクへの軍事攻撃後、イラク各地での食糧や生活必需品の提供などの支援活動を開始。SCJも現地に職員を派遣し、各国のSCメンバーと連携して緊急援助活動を実施。

＊黒字=主要概略　赤字=Emergency（緊急援助）

▼2004

世界中のSCと連携して、カンボジア/グアテマラ/エチオピア/コートジボワールで支援開始。

イラン南東部大地震
イラン南東部での地震発生後、SCJは現地に職員を派遣し、生活必需品の提供や医療機関の支援、トラウマに苦しむ子どもたちの心のケアなどの緊急援助活動を実施。また、子ども、及び出産前後の母親を主な対象とする基礎医療保健の支援事業を展開。



▼2005

スマトラ沖地震・津波
スマトラ沖地震・津波の発生直後、SCは全被害地域で支援活動を展開。SCJも現地に職員を派遣。子どもの保護・シェルター建設・生計支援等において緊急援助活動を実施し、現在も復興支援を継続中。

スーダン人道支援
独立以来30年以上内戦の続いているスーダンにおいて、SCは20年にわたり支援活動を継続。2005年からはSCJも現地に職員を派遣し、西ダルフール州で水と教育の分野で、中長期的視野にたった子どもへの支援を展開中。

パキスタン地震
パキスタン北部での地震発生直後、SCJは現地に職員を派遣し、被災地域において、食糧・生活必需品の提供、シェルターの確保などの緊急支援に加え、子どもの保護・教育・生計支援・栄養支援の分野で復興支援活動を継続して実施中。

多くの皆様から暖かいメッセージをいただきました。

さらなる前進を期待します

Burkhard Gnärig
（セーブ・ザ・チルドレン世界連盟CEO）

20年にわたり、SCJは、日本におけるSCの価値と活動を象徴してきました。それだけではなくSCJは、SC全体に日本及びアジアの価値観を提供してくれています。

SCJが20周年を迎えるにあたり、さらなる未来を見つめることが大切です。ジャパンに期待することとしては、まずこれまで培ってきた素晴らしい経験を活かして、私どもの支援を必要としている子どもたちにより良いサポートを行うことです。同時に、団体としてダイナミックに成長を続け、世界第2位の経済大国におけるSC団体として相応しい活躍を願っています。

SCJの今までの活躍に改めて感謝するとともに、世界中の子どもたちのために、さらなる前進を期待しています。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

忘れられないアン王女のお言葉

立野 純三
（社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン名誉理事長）

SCJ創立20周年を迎えられ、おめでとうございます。

私は、SCJ設立当初から関わらせていただきましたが、1987年、SCJが初めて援助をして完成したフィリピン イロイロ島の小学校竣工式に出席し、子どもたちや先生、そして地域の人々の喜びと熱烈な歓迎を受けたのが最初の思い出です。またその年の6月にロンドンのウインザー城で開催されたSC世界連盟の総会では、会議の内容がとても感動的で、また、最終日の懇親会に出席されたアン王女におかけいただいたお言葉は、今でもよく覚えています。

それは、日本でSCの活動が始まった事は喜ばしいことであり、我々のような若い人達が中心になり活動すればきっと成功するだろう、そして経済大国日本ならすぐにでも募金も集まるであろう、今後SCでの日本の活躍を期待するという内容で、非常にプレッシャーを感じました。その後何度か世界連盟会議に出席しましたが、加盟国の方々が真摯にプロ意識を持って世界の恵まれない環境にある子どもたちに、どうすればSCが貢献し環境を改善することが出来るのか議論されているのを聞くたびに、この運動の重要さを感じさせられました。またSCJの現地プロジェクトを訪問した時の経験は、言葉では表せないほど強烈ですばらしい印象でした。

そして忘れてならないのがSC運動の原質である募金活動です。多くの方々の善意によってSCJは成り立っています。この20年の歩みの中でSC崩壊の危機が何度かありましたが、その度に大阪青年会議所の物心両面からの支援で乗り越えたことや、SCJスタッフの懸命の自助努力を思い出します。

最後にSCJ設立当時、SCのノウハウを教えてくださった英米両国のSC、そして今までSCJで活躍された方々に感謝すると共に、SCJの今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

子どもたちの笑顔が、私にPowerをくれます

藤原 紀香

私の人生の転機は何度かあります。

一つは阪神大震災を経験し、人と人が見返りを期待することなく自然に助け合う様を見たときです。自分が今、生きている意味について考えさせられました。二つ目はホストファミリーの住むNYがテロに遭遇したときです。世界が今どう動いているのか、そして私が今、この仕事をやっていることの意味は何かということについて考えさせられました。そして、NYテロをきっかけに自分から企画したアフガニスタンへの旅でも大切な出会いがありました。辛いことを乗り越えようとしている子どもたちの姿。夢をかなえたいんだと学校へ何時間も歩いてゆく子どもの笑顔…。アフガニスタンの子どもたちの笑顔は、今でも私の心の中にあり、いつも私にPowerをくれます。SCJが今年20周年を迎えられるということは、大変な道のりだったことと思います。現地の子どもたちの笑顔、感謝の気持ち、支援してくださる方々のお気持があってこそ、ここまで来ることができたのだと思います。日本のNGOの草分け的存在として、これからも、世界中の子どもたちに笑顔を届けられるよう頑張ってください。

そして私も、アフガニスタンやカンボジア、東ティモールなどを訪れることができたご縁に感謝しつつ、そこで経験してきたこと、感じたことを日本の、世界の皆さんに伝えていきたいと思います。それが小さくても、自分にできることなのではないかなと思っています。

これからもSCJを応援していきます。おめでとうございます！



これからも期待しています

CHAGE & ASKA

SCJが20周年を迎えられるとのこと、おめでとうございます。一口に20年と言っても、スタッフの方々の努力、そして支援してくださる人たちがいてこその成果だと思います。これからも多くの子どもたちを支援していくことと期待しています。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

子どもたちの明るい未来へ、祈りを込めて

ゆず／北川悠仁

「子ども達の心の中にある純粋無垢な灯火を少しでも輝かせたい」そんな想いで、これまでいくつかのチャリティー活動をしてきました。今回、僕らのアルバム、そしてツアータイトルにもなっている「リボン」。これはそもそも「リボンマグネット」の志やデザインからインスピレーションを受けて、このタイトルにしました。

現在ツアーの中でリボンマグネットを販売し、初めてSCに参加させていただきましたが、リボンのようにこの活動が多くの方の心と心を結び合わせ、広がっていけばいいなと願っています。世界平和と子どもたちの明るい未来へ祈りを込めて……。

ゆず／岩沢厚治

SCの活動に参加して思った事は、こういう活動があるんだ、という事。参加させていただかなければきっとずっとそのままだったと思います。僕も含め、参加して頂いた僕等のファンの皆さんも、そういう方がいたと思います。

「音楽」は時として無力です。けれど時として誰かの命を救うかもしれないくらいの威力を発揮します。そんな奇跡みたいなことが世界で起こり続ければ何かがきっと変わる、僕はそんな事を何となく思って今でも唄っています。SCの活動に参加出来た事、出会えた事に感謝します。



思いは変わらず

鶴田厚子
（株式会社タック・インターナショナル
調査開発部主任研究員／元SCJ事務局長）

私は1988年11月から13年半、SCJでお世話になりました。世界中の子どもたちを愛し、子どもたちのため、そして子どもたちとともに少しでも良い世の中を作っていこうと、多くの皆様と共に歩みました。

SCJを離れてからも、私の思いには変わりはありません。SCJのことを思うと、今でも目頭が熱くなります。私が得たものはあまりにも大きく、深い感動や感謝の気持ちで一杯になるからです。現在はJICAなどのODA関係のお仕事を主にさせていただいておりますが、基本は常にSCJで培った思いであり、皆様とともに語り実践したことです。別の場所でSCJが掲げている理念の基本を広め実践しているともいえます。皆様にそのことをお伝えする機会を得、大変幸運に思います。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

多くのことを教えられました

正木 遊
（社会人ボランティア）

私がSCJに関わるようになったきっかけは、学生時代から国際協力やNGOに興味があり、国内でも参加できるようなボランティアを探していたからです。何より国内事業のスピーキング・アウト（SO）に関わらせて頂くことで、普段はなかなか触れ合うことのできない子どもたちとのワークショップを通し、自分自身も多くを教えられた気がします。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

数字の成果だけではなく

古山 裕基
（タイ在住。来年から青年海外協力隊のエイズ対策でベネズエラに派遣予定）

わたしは5年前に、タイのコンケーン県ポン郡にあるSCが支援する孤児院で1年間ボランティアをさせてもらっていました。

「今になって日本の人たちの支援があちこちで芽を出してますよ」と、ここで子どもたちを預っているノック先生は語ってくれます。ノック先生がやってきたことは「足るを知る」生活の実践を子どもたちに伝えることでした。

つまり農業を生活の土台にして、足りない部分を助けあったり、問題を解決するためのコミュニティーの強化を図ることです。そのような指導を受けて、リーダーとして自分の村に帰ってゆく青年たちを見たときにはじめて、SCの活動の結果を見たような気がしました。単なる数字の成果ではなくこのような現場の動きを日本国内のボランティア、支援者に伝えていくのも、NGOの大事な役割だと思います。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

国際協力につなぐ役割、期待しています。

仁平 貴子
（社会人ボランティア）

私は始動したばかりのSO初代インターンとして、2004年2月から半年間お世話になりました。

SCJは、メディア、企業、学校など社会の様々なアクターを国際協力に“つなぐ”という部分で可能性を持つ団体だと思います。そんなSCJが、さらにボランティアというリソースを活用し、国内の子どもに向き合う活動で果たせる役割は大きいはずです。ひとりでも多くの子どもに広い視野を持ってもらう、その責任を忘れずにがんばってください。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

学校建設の思い出

大内 和子
（社会人ボランティア）

私が初めてSCJの東京事務所を訪ねたのは今から7年前の秋でした。夏に亡くなった夫へのお香典を何か形にしたいとの思いからでした。会員になったのはその2年前、青年海外協力隊OBの娘に勧められたからです。

夫も私も広い意味で教育に関係していましたので「学校を建てたい」と思い、幸い2001年春にはネパールに完成し、私も現地を訪ねました。女性の識字率が8%という片田舎で、一生懸命勉強する女の子達の姿に強く心を打たれたことを覚えています。



14人のためにできること

小川真利枝
（大学生ボランティア）

世界がもし100人の村だったら…大学へ行ける人は1人、字が読めない人は14人。当時大学浪人をしていた私は、この事実に衝撃を受けました。そして、自分がその1人の中に入れるのなら、その立場を利用して、14人のためにできることをしようと決めました。その思いから数多くの国に行きましたが、SOを通し、海外だけではなく日本のことを考えられるようになりました。それは、SOを受けた子ども達からの感想に影響を受けたことがとても大きいと思っています。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の20年へ、私たちもバックアップしていきます

服部悦子
（社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン顧問）

SCJの設立には初めから関わることができ、大変嬉しく思っています。思い返せば、SCJ設立には多くの方々の関心とタイミングが見事にマッチし、偶然であると同時に必然の道筋を辿ったような気がしております。

人づてに聞いたお話ではございますが、SCに最初に関心を持たれたのは、故秩父宮妃殿下が英国のロイヤルファミリーの方からその活動の素晴らしさを伺ってということです。また、来日されたアン王女から当時の美智子皇太子妃にお勧めがあったというお話も伺っています。そのような状況が重なる中、当時の英国大使夫人に英国SCから日本でもぜひSCを立ち上げたい、という申し出があり、私も役員を務めております国際婦人福祉協会にお話がありました。ちょうど協会の方でも“もっと海外に目を向けていこう”という気運が高まっていた時期でした。

とは言うもののSCのことは何も知らない私たちでした。ちょうどコペンハーゲンで会議があるということで、協会から私とあとお二方で参加させていただいたのが、まさにSCJ設立へのスタートだったのではないかと思います。

とにかく、SCの方々の熱意と使命感、そして活動内容とその組織力に圧倒され、感動したことを今でも覚えています。私たちも熱い思いで、SCJ設立への働きかけを始めたところ、やはり“何かしたい”というプランを出していた大阪青年会議所と出会うことができたのです。

それから早20年。決して平坦な道ではありませんでしたが、スタッフの方々の危険を押してのご活躍のおかげで、ここまで来ることができたと、感慨深いものがあります。残念ながら、世界の状況はますますSCの活躍を必要としています。スタッフの方々のますますのご活躍を、私たちもバックアップしていけるよう応援して行きたいと思います。次の20年のSCJのさらなる発展を楽しみにしています。



特集：セーブ・ザ・チルドレンと「権利に基づくアプローチ」

近年、国連や国際NGOなどの間では、人権の視点から開発に取り組む「権利に基づくアプローチ」(Rights-Based Approach)が主流となってきています。人権、開発、そして社会運動の視点を盛り込んだこのアプローチは、貧困の解消や公正な社会の実現に、より有効だとされています。「国連子どもの権利条約」を活動の基本に据えているセーブ・ザ・チルドレン(SC)でも、子どもの権利の視点から事業を計画・実施・評価するため、この考え方を全ての活動に取り入れています。「権利に基づくアプローチ」について、ご紹介します。

■「権利に基づくアプローチ」とは？

「権利に基づく」とは言っても、これまでの開発の考え方と相反するものではありません。これまでの開発援助の考え方に、人権の原則や概念を取り入れたアプローチです。人権とは、国際的に合意された法的・道義的基準のことを言いますが、このような客観的な基準は、これまでの開発援助には存在しませんでした。開発・社会運動・人権の3つの要素が合わさることで、公正・平等・自由を促進し、貧困や搾取の根本的な原因である社会の力関係や構造的な問題に取り組むために有効であるとされています。

■切り離せない「開発と人権」

「権利に基づくアプローチ」が導入されるようになった背景の一つには、1990年代に入り、それまでの経済成長だけを目指した開発が必ずしも効果を上げておらず、むしろ貧富の差が拡大し貧困問題が悪化してきた状況を受けて、社会開発や人間中心の開発への転換が起こってきたことが挙げられます。1993年の世界人権会議、1997年の国連改革計画を経て開発と人権は切り離せないものであることが確認され、開発に人権の視点を取り入れることが主流となってきました。

■権利の実現には責任者が必要になる

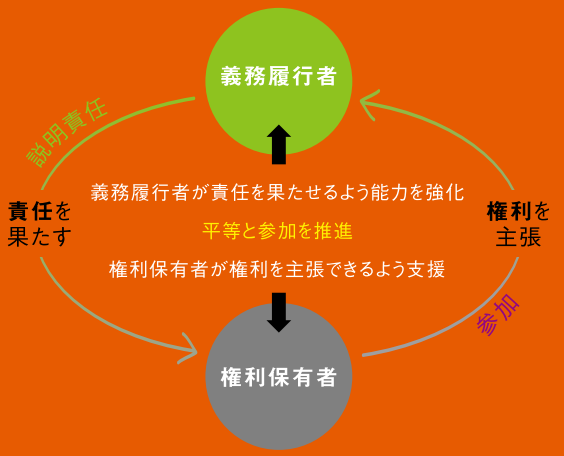
「権利に基づくアプローチ」の最大の特徴は、権利の実現には必ずそれを満たす責任者が必要であると考える点です。権利を持つ人のことを「権利保有者」、その権利に責任を負う人のことを「義務履行者」と言い、後者には前者の権利を実現する責任があるとされます。人権を保障する義務は主に政府にあるとされますが、それ以外にも多数の義務履行者が存在します。例えば、

▼ 従来の開発アプローチと人権に基づくアプローチの比較

従来の開発アプローチ（ニーズに基づくアプローチ）	権利に基づくアプローチ
慈善、ボランティア（主観的）	社会的、政治的、法的責任を伴う（客観的、普遍的）
状況を改善	根本原因を改善
サービスや物資の提供	権利の自覚や主張を促す
特定の対象に対する特定の事業（短期的視点）	総合的・包括的な事業（長期的視点）
貧しい人々は支援に値する	貧しい人々は支援される権利がある
政府は何かをすべきだが、責任の所在が不明確	政府には法的道義的な責任がある
支援対象の人々は、活動に参加できる	支援対象の人々は、活動に積極的に参加する権利がある
支援を受けられない人々も出てくる	全ての人には等しく権利があり、それは満たされるべきである

▼ 図1

義務履行者と権利保有者、援助組織の関係
義務履行者：権利保有者に対してその責任を遂行
権利保有者：参加によって自らの権利を主張
NGO・国連などの援助組織：義務履行者、権利保有者の双方をサポートし、平等や参加を推進





「子どもを学校に通わせよう!」と誓う低位カーストの女性たち（ネパール）



SCJ活動10周年記念式典でスピーチする少年（ネパール）

「子どもの権利」の実現に責任を負う義務履行者には、政府以外にも親、家族、地域社会、国連、NGO、民間企業、メディア、宗教団体など多様な組織や人々が含まれます。（図1参照）

■SCと「子どもの権利」

SCは、様々な人権の中でも特に「子どもの権利」に焦点を当てて「権利に基づくアプローチ」の実践に努めています。その際に基本となるのが「国連子どもの権利条約」です。

「国連子どもの権利条約」は1989年に制定され、その原案にはSC創始者のエグランタイン・ジェブが深く関わっています。0歳から18歳未満の子どもを対象とし、子どもが権利の主体であることを確認していることが特徴です。これまでに192ヶ国が批准しており、世界で最も普及している人権条約です（日本は1994年に批准）。

子どもの権利条約には、子どもをとりまくあらゆる状況で考慮すべき4つの基本原則があります。

ー子どもの生存と発達（第6条）
ーあらゆる差別の禁止と平等（第2条）
ー子どもの参加（第12条）
ー子どもの最善の利益（第3条）

これらの原則を実際の活動に反映させると共に、「権利に基づくアプローチ」において大切なことは、子どもの基本的な権利が満たされない状況がある場合、子どもとその親や地域社会がそれに気付き、共通の問題として認識し、子どもの権利を守るための行動を起こすよう後押しすることです。また、義務履行者に対しては誰がどのように責任を負うのかを明確にし、その責任を果たせるよう資金援助や能力強化、説明責任を問う仕組み作りなどの支援を行うことです。

■SCJによる「権利に基づくアプローチ」の実践

SCJでは、全ての事業において「権利に基づくアプローチ」を推進する方針が2005年度に改めて確認されました。取り組み例をご紹介します。

ネパール

ネパールでは1992年より支援活動を開始し、2001年度より「権利に基づくアプローチ」で事業を実施しています。「全ての子どもを学校へ通わせる」ことを目指す教育事業では、子どもをはじめ、地域の教育関係者、保護者、青年団、女性グループ、低位カースト住民グループなど地域の住民全体を巻き込んで、「子どもの権利」に関する意識の向上をはかります。また「全ての子どもが学校に通えるようにしなければならない」という社会規範を形成し、各自が具体的な行動（例：親は子どもを働かせず毎日学校に通わせる。先生は毎日休まず遅刻せずにわかりやすい授業をする。政府は十分な数の教科書、先生、教室を確保する）を起こせるよう後押ししています。



教室建設に関する会議には子どもたちも出席（ネパール）

アフガニスタン

長年続いた戦火と混乱の影響が残るアフガニスタンにおいて、SCJはこれまでに2003年、2004年、2005年と子どもたちが主体となって参加する「子ども会議」を他団体と共同で開催してきました。

「子どもは従順で大人に従うべき」との考え方が一般的なアフガニスタン社会において、子どもたちが子どもの権利について学び、自分たちの問題を話し合い、政府や社会に対して直接声を上げ、メッセージを伝えるという機会は大変画期的なことです。

会議に参加した子どもたちの中には元子ども兵士、孤児、ストリートチルドレン、国内避難民、障がいを持つ子どもなども含まれ、また来賓には政府各省庁の役人やメディア、2004年にはカルザイ大統領も参加し注目を浴びました。子ども会議を単なる発表の場として終わらせるのではなく、活動の出発点としていかに今後の事業計画・運営に反映していけるかが私たちの課題です。（広報マーケティング部　堀江由美子）



子ども会議で発表する女子（アフガニスタン）

「パーミヤン、そしてアフガニスタン全国に子どもの権利のための組織を作って権利を実現してほしいと思います。この国が10年前に署名したはずの『子どもの権利条約』はどうして実現されないのでしょうか？地雷、交通事情、学校の先生の不足、学校へ行けない女子がたくさんいることなど、問題はいくらでも残されたままです。」

（女子15歳-18歳グループ　2003年パーミヤン会議より）

社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン収支概要

［2005年1月1日～12月31日］

皆様のご支援により、当期収入は7億9,831万5,937円となりました。ありがとうございました。
収入と支出の概要をご報告します。

詳細な決算報告はホームページでもご覧いただけます。
www.savechildren.or.jp/about_sc/publications/index.html

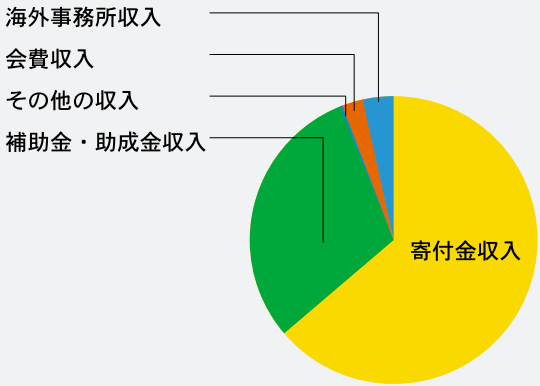
ホームページ上の決算報告は、外務省へ提出した正式な「計算書類」です。
本誌では、皆様にご理解いただきやすいよう、一部科目名を変えています。
千円未満は四捨五入で表示しています。

収入の部

（単位：千円）

科　目	決算額
1.寄付金収入	494,296
無指定寄付	209,746
指定寄付	105,530
緊急援助指定寄付	176,259
啓蒙事業寄付	2,761
2.補助金・助成金収入	235,330
政府補助金収入	44,646
民間助成金収入	190,684
3.会費収入	16,641
4.その他の収入	458
5.海外事務所収入	28,832
当期経常収入	775,557
特定預金取崩収入	22,759
当期収入合計額	798,316
前年度繰越金	64,972
収入合計	863,288

経常収入内訳

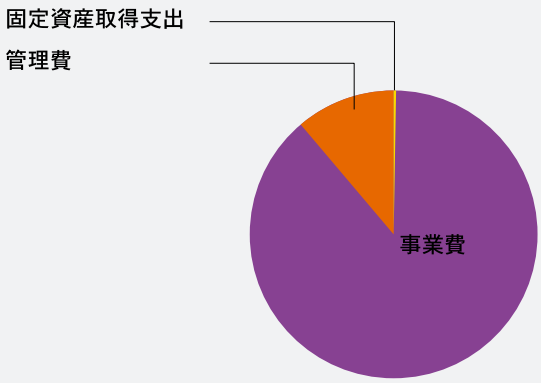


支出の部

（単位：千円）

科　目	決算額
1.事業費	569,123
海外援助費	208,097
ネパール事業	33,397
ベトナム事業	33,099
ミャンマー事業	21,589
アフガニスタン事業	41,116
世界連盟事業	27,795
海外事業人件・活動費	51,101
緊急援助事業費	260,366
国内事業費	8,626
国内啓蒙費等	92,034
2.管理費	66,315
3.固定資産取得支出	912
当期経常支出	636,350
特定預金積立	15,355
当期支出合計額	651,705
次年度繰越金	211,583
支出合計	863,288

経常支出内訳



現地レポート

～皆様のご支援に感謝申し上げます～



Pakistan
【パキスタン】

地震の支援活動と子どもたち

被災者と援助機関にとって最も厳しい挑戦であった越冬シーズンも終わりを告げ、パキスタンも暖かくなってきました。SCは、パキスタンのカシミール地方に位置するムザファラバード市で、シェルター、教育、子どもの保護、生計回復の分野で支援活動を行っています。今回は、その中でもSCの最も重要な柱である子どもの保護活動についてご紹介します。

■子どもたちの様子をより理解するために

SCは、ムザファラバード市内外の避難キャンプ21ヶ所に、セーフ・プレイ・エリア(SPA)と呼ばれる子どもの遊び場を設置しています。被災した子どもたちが、遊びを通して日常を取り戻すための場です。SPAは子どもや親たちの抱える問題を探る足場としても活用されており、今年の1月後半から2月末にかけて、SPAを設置している市内外の9ヶ所のキャンプで、被災後の子どもたちについての調査が実施されました。調査は、各コミュニティのリーダー、学校教師、医療関係者、親、年齢層の異なる子どもたちを対象に、参加型ワークショップを通して行われ、調査の結果は、SCの活動に反映するために活用されています。

■キャンプでの子どもたちの生活

子どもたちに地震前後の生活の変化を質問すると、特に年齢の低い子どもたちは、「キャンプに住むようになり、お友だちがたくさんできた」、「キャンプ内に学校や病院があり長時間歩かなくて済む」、「水を遠くまで汲みに行く必要がない」等、良い側面をあげています。

しかし、一方で、キャンプ生活に問題を抱えている子どもたちも多くいます。特に、不十分な学校設備や教材の配給不足、トイレや水など衛生面での施設整備の遅れが課題となっています。また、多くの女子は、キャンプ生活ではプライバシーが保ちにくく身の安全が十分に守れないと感じています。地震がもたらした貧しさが多くの子どもたちを労働に駆り立てている事実も散見され、SCは児童労働の現状を明らかにするためのさらなる調査を行い、長期的には労働する子どもたちをサポートするためのセンターを設置する予定です。

■人々の帰還が進む中

また、春がおとずれ、被災者の帰還が進む中、多くの子どもたちは自宅の状況は大丈夫なのかといった帰還した後の生活への不安を抱えています。SCは、今後被災者の帰還した高所の村に活動の対象を広げ、子どもの保護のコミュニティネットワークの構築やSPAの設置等の活動を続けていきます。また、同じ地域で活動しているSCの教育と生計回復チームとの連携を強化し、子どもたちにインパクトのある複合的な支援活動を行っていきます。

(パキスタン・ムザファラバード事務所　鈴木惠理)



調査ワークショップに参加する子どもたち



Guatemala
【グアテマラ】

貧困対策の中心は教育の充実に

グアテマラでは、何世紀にもわたる侵略と紛争が、かつて豊かであった文化を、経済的・社会的に問題を抱えた国へと変えてしまいました。1960年から36年間続いた内戦によって地域社会は壊滅状態となり、貧困問題は深刻です。

■基礎教育の提供に重点

SCは、すべての子どもたちが学校に通い基礎教育を受けられる機会を作ることがグアテマラの貧困を減らす効果的な方法と捉え、基礎教育の提供に重点を置いています。そのために、地域や親に対しての教育啓発活動、学校の運営能力の強化、正規の学校教育を受けられない子どもたちのためのプロジェクト、子どもを中心とした教育方法の導入などの支援を実施しています。同時に、子どもの児童労働を削減するための活動にも取り組んでいます。また、伝統的なマヤ文化を受け継いでいくために、教育省と協力して芸術振興活動も行っています。

■食糧の安全保障への取り組み

種苗の提供、農業技術の供与、経営、など地域における農業全般の改善を支援しています。インフラ整備・保健・衛生・生計支援などの活動を通し、地域経済の向上を目指しています。

■母子の健康に配慮

健康全般に関して、若者の知識共有とリーダー育成を目的に支援活動を行っています。特に、家族計画・母子保健に関する知識を普及することに焦点をあてています。出産後には、母親など地域住民に対し、子どもの病気の予防法、症状の見分け方、適切かつ迅速な治療法について教育しています。

また、内戦でトラウマを抱えた子どもの保護と社会復帰を支援しています。紛争で行方不明となった子どもたちが家族と再会できるよう捜索活動の支援も行っています。

■ハリケーン・スタン災害への対応

昨年10月初旬に中米を襲ったハリケーン・スタンの被害に、SCは現地での長年の経験を活かし、迅速に対応することができました。



子どもに対する基礎教育の充実に重点

Partnership

南陽食品
健康・栄養改善支援事業を全面支援

和歌山県の南陽食品株式会社が、「セーブ・ザ・チルドレン・藤原紀香アフガン基金」に賛同し、学童期の子どものための健康・栄養改善支援事業を全面的にサポートしてくださっています。北畑社長は同社が目指す“食文化の追求”への思いを込め、「困難に直面している子どもたちへの支援に国境はない。子どもらしい明るい笑顔を取り戻してもらいたい」と語ってくださいました。同社のご支援はアフガニスタンの基礎教育復興への大きな力となっています。



左：北畑社長、中央：藤原紀香さん

サラヤ
商品にSCJ応援メッセージ

「自然派のサラヤ」の愛称で親しまれるサラヤ株式会社は、世界の子どもたちの夢と笑顔をサポートするため、石鹸や洗剤の商品でSCJを応援するメッセージを発信してくださっています。また、企業として継続してご寄付をいただいています。

サンヨー食品
SCJを継続して応援

ラーメンでお馴染みのサンヨー食品株式会社も継続的にご寄付をくださっています。年間1億食以上も流通している人気ブランド、「サッポロ一番」袋麺のパッケージ上で、SCJを応援するメッセージ発信を行っています。



（写真：みそラーメン）

Save the Children
子どもたちに、もっと笑顔を。
セーブ・ザ・チルドレンは、国連に承認された、海外援助団体(NGO)です。

サンヨー食品はセーブ・ザ・チルドレンを応援しています。

ライダース・パブリシティ
創立40周年チャリティの寄付先にSCJ

日本における「住宅展示場」のパイオニアで、豊かな社会の実現に貢献すべくチャレンジを続ける広告代理店、株式会社ライダース・パブリシティが創立40周年チャリティの寄付先としてSCJを選んでくださいました。チャレンジし続けるSCにとってこの上ないご支援となりました。

高松商事
売り上げの一部を寄付

高松商事株式会社は、園芸関連商品を取り扱う会社です。お花の売り上げの一部を寄付してくださっています。「世界中に助けを必要としている子どもたちが大勢いることを多くの人に知ってほしい」と、大変意欲的に取り組まれています。

タリーズコーヒージャパン
売り上げの一部を寄付

タリーズコーヒージャパン株式会社の経営理念の一つ、「子ども達や青少年の成長を促すために、地域社会に貢献する」に基づき、絵本を通じて若手アーティストを発掘・支援し、またその絵本を読む子ども達へ夢や希望を与えたい、と始めた絵本公募「タリーズ・ピクチャーブックアワード」は2005年で3回目を数えます。現在、受賞作品5点を出版し店頭販売しています。フェロー賞受賞作品「まいごのくもちゃん」など、心温まる絵本の売り上げの一部がSCJに寄付されます。

タリーズコーヒーはコーヒー豆「バンビーノブレンド」の売り上げの一部も寄付してくださっています。このたびパッケージがリニューアルされ、SCJのロゴと応援メッセージを記載していただけることになりました。絵本や「バンビーノブレンド」で、子ども支援に、美味しく楽しく参加してください。

エスエスケイ
ホワイトバンドの売り上げの一部をSCJに

株式会社エスエスケイは、SCJホワイトバンドを全国のスポーツ用品店他で販売し、1個につき100円をSCJに寄付してくださっています。貧困問題を解決しようという意思表示をしながら、子どもの支援もできるホワイトバンドをよろしくお願いします。



Event

セーブ・ザ・チルドレン・キャンペーン もっと知ってほしい 世界の子どもたちのこと

3月6日から14日間にわたり東京 表参道のt's Harajukuにて、セーブ・ザ・チルドレン・キャンペーンを行いました。

一般的には、まだ馴染みが薄いNGO活動ですが、キャンペーンを通してSCについて多くの方に知っていただくことができました。ブースではスタッフが、ビデオやパネルで世界の子どもたちの現状とSCの活動を紹介し、継続的なサポートをお願いしました。

3月の寒い中だったにもかかわらず予想を上回る多くの方に来場いただき、SCの活動に興味をもっていただく良い機会となりました。

これからも、いろいろな場所でキャンペーンを行っていく予定です。赤いテントを見かけたらぜひお立ち寄りください。





神様が求めていること

サフィダル・ハヤット
（アフガニスタン事務所／プログラム・オフィサー）

長く教育省の教員養成局で勤めてきた私は、SCJが2002年にアフガニスタン事務所を開設してまもなくスタッフとなりました。

子どもたちのために働く事は、神様が求めていることだと信じています。そして国の発展は、子どもの成長にかかっています。

SCJで働くということは、世界の恵まれない子どもたちのために働くことでもあります。
私たちの支援によって成長した子どもたちが、いつか世界中の人々のために働く日がくることを、日本の皆様と一緒に信じて、私は活動していきます。



お金に換えられない価値ある業務

グエン・ティ・トゥ・ハ
（ベトナム事務所／事務管理担当）

教育訓練省を辞め、SCJで働き始めてから1年が過ぎました。子どもの権利への理解が深まったことでベトナム人女性としての責任に気付くことができ、また長年勤務しているスタッフのやる気に触発され、仕事にますますのやりがいを感じています。ここでの業務にはお金に換えられない価値があるのです。

私は、ベトナム人として、日本の皆様がこの国の子どもたちのために温かい手を差し伸べてくれることに感謝しています。職員としてさらに成長し、より良い組織となれるよう仲間たちと力を合わせていきたいと思います。



私が感じた喜びをすべての子どもたちに

カウシリヤ・クスバハ
（ネパール事務所ローカルパートナーのアスマン・ネパールのチャイルド・ライツ・プロテクター）

私は、SCJが開いた9ヶ月間の朝の識字教室で、生まれて初めて読み書きを学びました。今でも、識字教室で過ごした楽しい日々のことを覚えています。家の経済状況は貧しく、叔父は私が更に勉強する事を快く思っていませんでしたが、SCJの支援のおかげで、ついには10年生(ネパールでの高校修了にあたる)を修了することができました。自分が以前直面していたような問題で、これ以上子どもたちが苦しまないようにと、チャイルド・ライツ・プロテクターとして働けることを嬉しく思い、やりがいを感じています。

ご寄付のお願い

「子どもたちの力になりたい」あなたの気持ちと子どもたちをつなぎます

●チャイルド・リンク（地域指定の継続サポート）
アジア、アフリカ、ラテンアメリカよりサポートしたい地域を選んで、子どもたちを長期的にサポートすることができます。定期的に届くレポートでは、代表の子どもの報告など子どもたちの目を通して、支援がどのように役立っているかを知ることができます。
（月々3,500円～）

●SCサポート
世界各国で実施しているセーブ・ザ・チルドレンの活動を長期的に支援いただくプログラムです。国や地域を限定せず、貧困、紛争など様々な理由で、教育、栄養、医療保健などのサポートが受けられない困難な状況にある子どもたちへの継続サポートです。
（月々1,500円～）

●一般寄付
ご寄付や募金は、随時受け付けております。
振込手数料免除の下記口座をご利用ください。
振込先：郵便振替口座 00900-1-120760
加入者名：セーブ・ザ・チルドレン子ども基金

詳しくはフリーダイヤルまたはメールにてお問い合わせください。
フリーダイヤル:0120-317-502（平日9:30～18:00）
e-mail:info@savechildren.or.jp

＜税控除のご案内＞
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、特定公益増進法人として外務省の認可を受けています。一定の要件下で控除の対象となります。
申告の際には、“特定公益増進法人の証明書”と“寄付領収証”が必要になりますので、必要な方は事務局までご連絡下さい。

発行元
社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
発行日：平成18年 6月 1日
〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町3-2-6 ストークビル 8F Phone:03.3516.8922 Fax:03.3516.8923
www.savechildren.or.jp